

アルザスの歴史を探って、ヨーロッパを知る

ブランシャール・ニコラ（「比較都市計画」、「ヨーロッパの言語と文化」担当）

フランス東部に位置するアルザスは、毎年経済学部が主催するヨーロッパ研修地であり、協定校であるストラスブール大学がある地方である。この講義を通じて、7つの歴史の場面を紹介しながら、「アルザス」という、フランスの中でも独特の歴史背景を持つ地方のアイデンティティと、ヨーロッパとの関係を紹介する。

1. ケルト人の土地アルザスと古代ローマ帝国による支配

現在はフランス領となっているアルザス地方には、紀元前 1500 年頃からケルト人が住んでいた。ところが、紀元前 1 世紀の半ば頃からゲルマン系のスウェビ族がアルザス地方に勢力を伸ばし始めた。

その圧迫を逃れるためにアルザス地方のケルト人が助けを求めたのが、古代ローマ帝国のシーザー（カエサル）だった。紀元前 58 年、シーザーはゲルマン系スウェビ族の王を撃ち破り、更にはガリアのウェルキンゲトリクスに打ち勝った。その結果、アルザス地方を含むガリアが古代ローマ帝国の版図に入ったわけだ。

その後、シーザーの養子オクタヴィアヌスがアウグストゥスとして古代ローマ帝国の初代皇帝となった。その養子となったドルルスはライン駐留軍を率いてアルザス地方に駐屯。ドルルスの築いた要塞都市アルгентラトゥムが今のストラスブールの起源だと考えられている。

古代ローマ帝国によるアルザス支配とブドウ畑

今のアルザス地方でワイン作りのためのブドウの栽培が始まったのは、西暦 2 世紀の頃、つまり古代ローマ帝国の支配下にあった頃だと考えられている。

その後もアルザス地方のブドウ畑は広がり、現在もワイン作りはアルザス地方の主要産業の一つになっている。

2. フランク王国・神聖ローマ帝国支配下のアルザス地方

西暦 451 年、古代ローマ帝国によって築かれた要塞都市アルгентラトゥム（現在のアルザス地方の中心都市ストラスブール）が、ゲルマン系アレマン人によって壊滅に追い込まれた。

ゲルマン系アレマン人は、ストラスブールを中心とするアルザス地方に住み着いた。ストラスブールは彼らの手によって再建された。

そして西暦 496 年、アルザス地方のアレマン人はフランク王国のクローヴィスに征服された。以後、

アルザス地方はフランク王国、そして神聖ローマ帝国によって支配されることとなった。

しかし、アルザス地方に定着したゲルマン系アレマン人は、ここで独自の文化を育てていった。例えば、その代表が独特なアルザス語。このアルザス語は、アレマン人が使っていた西ゲルマン語系アレマン語から発達したもの。また、アルザス地方には、アレマン語を起源とする人名や地名も多い。

ストラスブールの誓約(シュトラースブルクの誓約 Serments de Strasbourg)

西フランク王シャルル2世と東フランク王ルードヴィヒ2世・ドイツ人王という兄弟によって、842年2月14日に結ばれた条約。これは長兄ロタールに対抗するために結ばれた。二人は相手に分かるように、それぞれ相手の言語でこの約束を行った。古フランス語(百年戦争の始め頃まで使用された言語)で書かれた最初の史料とされている。この事件を記した『ルイ敬虔帝の息子たちの歴史』は、その誓約文を収録している。この誓約を経て、翌年の8月に三兄弟王の間でヴェルダン条約が結ばれることになる。

3. 自由都市ストラスブールの発展

西暦1230年頃、アルザス地方に隣接するスイスのザンクト・ゴットハルト峠が開通。イタリアからスイスを経て運ばれてきた物資は、このアルザスを通過して北へ運ばれるようになった。その結果、アルザスが経済的に発展した。

というわけで、ヨーロッパの南北を結ぶ商業ルートの核として発展したのが、ライン川の水運を利用することのできるアルザス地方(現在はフランス領)だった。他方で14世紀には、古代ローマ帝国以来の歴史を持つアルザス地方のワイン生産は最盛期を迎えようとしていた。大河ラインの支流、イル川の中州に築かれた旧市街「グランディール」は、ヨーロッパ交易の十字路だった。木材やワイン・絹などの船荷が、莫大な収益をもたらす。それ故に、仏独の2国は、激しい争奪の歴史をくり返した。ストラスブールは、何度も国籍を変えられたのだ。1648年にウエストファリア条約によってほとんどのアルザスの土地がフランス領になった。

17世紀まで、この地は封建領主に支配されず、20もの商人や手工業者の組合「ギルド」が治める自由都市だった。各ギルドは、職種ごとに固まって、ドイツ風の木骨組みの家に暮した。木骨を埋め込んだ壁は、レンガが半分以下で済む。また、2階から上がせり出た壁は、床面積を広げた。

12世紀、パリの近郊で誕生したゴシック様式は、この街からドイツへと伝わった。大聖堂の建築のために、美術史にその名を残すこともない職工たちが集い、1つの奇跡を成し遂げたのだ。中世の彫刻家は、目に見えるものの背後にある、目に見えないものを刻んだ。高さ142m、ノートル・ダム大聖堂の尖塔は、中世ヨーロッパで随一の高さを誇った。石工たちは、250年の歳月をかけて、もろい砂岩を積み上げたのだ。ストラスブール大学に通いながら、青年時代を過ごしたゲーテは、この塔に登り、「比べるものなく美しい」ストラスブールの街を眺めた。そのほか、15世紀、グーテン

ベルクがここで活版印刷術を発明したと言われている。そこには、宗教も思想も人間も、すべてを包み込む「寛容」な都市の姿があった。

4. フランス革命のフランス国歌「ラ・マルセイエーズ」

大革命の最中、ストラスブールの青年将校によってつくられ、「ライン軍軍歌」と名づけられたが、マルセイユの連盟兵によって歌われて全国に広まったので、この名で呼ばれた。1792年4月オーストリアに対して宣戦布告がなされたとき、ストラスブール市長は前戦におもむく兵士を招いて激励した。そこに居あわせたルージュ＝ド＝リールが愛国的興奮状態のなかで一晩で曲と歌詞をつくりあげたと伝えられる。同年6月、マルセイユの集会で歌われて大好評を博し、7月マルセイユ連盟兵はこれを歌いながらパリに入り、8月10日のテュイルリー宮襲撃に主導的な役割を果たした。以来この歌は、革命と祖国に対する忠誠の表現となり、1795年、国歌となった。王政復古とともに禁止されたが、1830年や1848年の革命のたびによみがえり、第二帝政期には忘れられかけたが、1879年第三共和政下において再び国歌の地位を回復した。

5. 普仏戦争からナチ戦略解放、アルザスの言語戦争

アルザス人たちは一六四八年以来フランス人となり、フランス革命やナポレオン戦争を戦い、その後二度ドイツに併合された(普仏戦争後に四十八年、ナチス・ドイツに五年)。ドイツ帝国の支配化では、アルザス地方に再び公用語としてのドイツ語が導入され、それに伴い数々の言語対立が生まれた。同時に、2言語使用の導入の是非がおもに教育面で議論の対象になり始めた。第1次世界大戦が終結した後、アルザス地方は再度フランスへ復帰した。当然公用語としてのフランス語がドイツ語に代わり重視されるようになり、その結果としてのドイツ語およびアルザス方言の政策上の軽視がアルザス住民の反発を生み、言語政策をめぐる住民と政府側の対立は深まっていた。ナチス支配では、アルザスにおけるフランス的なものがことごとく排除され、ドイツ的なものへと変換されていった。当然フランス語もその対象になった。

6. 戦後のアルザス・EUの象徴

ヨーロッパの平和は独仏の和解から」という考えからここストラスブールに欧州議会が置かれた。この欧州議会はEUの機関として大切な役割を(立法権を持つ)果たしている。そのほかに、欧州人権裁判所とヨーロッパ評議会もストラスブールに1949年から拠点している。つまり、協力して欧州統合を推進しているフランスとドイツとの国境地帯にあるために、地理的にはフランスの「周辺」であるが、それと同時に、欧州の「中心」としての性格も兼ね備えている地域になっている。また、経済的にも国境の壁が低くなったことにより、ドイツとの交流がより日常的になり、外資系企業が多数進出しているという点では、地域主義を掲げている他のフランス地方とやや異なるといえる。世界大戦では敵国同士だったフランスとドイツも今ではEUの中心となる友好国になった。それを

一番象徴しているのは2006年の5月に出版された高校生向けの共同歴史教科書である。教科書の統合を通じて、歴史認識も統合しようという画期的な試みだといっても過言ではない。

7. 現代のストラスブールの特徴:交通対策

戦後、ドイツの街づくりから影響を受けて、ストラスブールは、クルマ依存社会から脱却し、徒歩・自転車・公共交通を中心としたまちづくりを目指して様々な交通政策が実施されている。トラム導入も、軌道系交通機関導入による公共交通の抜本的改善および拡充を目指したものであると言える。公共交通ネットワークの整備・強化と併せて歩行空間の確保、自転車道の整備、それに必要な空間を確保するための種々の自動車利用規制が行われている。都心は、歩行者優先空間として、自動車は出来る限り使わないように誘導する。すなわち、交通を都心から排除し、都心に用事があるクルマ以外乗り入れないようにする。都心外縁部や郊外部では、自動車走行空間を確保しながら、公共交通や自転車が優位になるように整備される。

参考文献

「アルザス文化史」、市村 卓彦、人文書院、2002

「フランスの田舎町」、吉村葉子・宇田川悟、日経 BP 社、2000

「アルザスから ヨーロッパの文化を考える」、新田俊三、東京書籍、1997

「アルザスの言語戦争」、ウージェーヌ フィリップス、白水社、1994

「消えた最後の授業一言葉・国家・教育国語教育ライブラリー」、府川 源一郎、大修館書店、1992

「アルザス文化論」、フレデリック・オッフエ、みすず書房、1987